会山行 NO.2164

谷川：一ノ倉沢 烏帽子岩 南稜　未遂編

◆日程　　2017 年 10 月 8 日(日)

◆メンバー　L ： 須田、日比野、佐藤俊、前田、小山田、岡村

前日、須田車と前田車に分乗し午後３時半くらいに横浜を発ち午後６時くらいに雨の水上に着く。「諏訪峡」という店で豪勢な夕飯をとる（カレー，カツ，ハンバーグ)。スーパー，コンビニで明日の行動食等を買い込んだ。ロープウエイ駐車場はイベントで閉鎖されていた。道の駅「水紀行館」でテント泊。佐藤さんが山麓情報に詳しくて助かった。近くに定宿があるそうだ。須田さん日比野さん以外は岩の本チャンが初めてだったので，綿密な打ち合わせをした。

10 月 8 日(日)　天候：晴れ

２時起床。朝食はラーメン。オリオン座が見えた。３時には車でロープウエイ乗り場近くの町営駐車場に移動開始。そこから歩き始めた。登山指導センターで計画書を投函。同センターでは数人が寝ていた。マチガ沢を過ぎ，一ノ倉沢出合に到着。月明かりがあった。気温は高く，風も冷たくない。ヘルメットを装着し，出合を出発。しばらく川原の左岸を歩き，渡渉して樹林帯に入る。右手で沢の音がするが，川は暗くて見えない。唐突に一ノ倉沢の川原に出た。

一ノ倉沢全貌

ここは一ノ沢との出合にもなっていた（一ノ沢は一ノ倉沢の支流。似た名前だが，当然，別の沢)。一ノ倉沢の川原を進んだ。暗い。暗がりの中，正面に「絶壁」が浮かび上がる。とても登れそうにない。トポによれば，ここに滝があり，高巻く道が左手にあるはずだ。ところが，このとき，われわれがいた周辺ではおかしなことが起きていた。何か磁場が狂うようなことが起きていたようにさえ思う。あるパーティは「絶壁」をライトで照らして停滞し，あるパーティは道のないヤブを漕いで左手の丘に登った。またあるパーティは「滝を高巻くルートの入り口がわからない」とつぶやいて右往左往していた。

思い立ち，先ほど川原に出た場所まで戻って，一ノ沢を少し遡行してみることにした。しばらく行くと，左のヤブから飛び出してきた人が「こっちに高巻きのルートはない」と言って下っていった。さらに右のヤブからは，先ほど左手の丘に登っていったパーティが飛び出してきた。聞けば「全然ルートに当たらない」という。また，「一ノ沢を遡行してもチョックストーンの滝でドン詰まりになる」ともいう。

わがパーティは，チョックストーンの滝を，左岸の草付きを高巻いて越えた。この草付きはとんでもない悪場で，滑る斜面を必死に草をつかんでトラバースした。「多くの人が訪れる南稜のアプローチで，こんなことってあるのかな」と思った。しかし，本チャンは一般ルートとは違ってこういう厳しさがあるのかもしれないと思い直した。また，上記各事情を総合考慮すると他にルートが見あたらなかったこと，チョックストーンの先は向かうべき方向に沢が伸びていたこと等から，その先を進むことにした。

明るくなってきた。見回すと紅葉が美しい。しばらく行くと，釜も滝も１つの岩で構成されているような美しいナメ滝がいくつも現れる。いずれも「赤い苔」がついていて，ビブラムソールでは滑って歯が立たない。巻いて進む。探したが，設置された支点は，このルート全体で，数本しか見あたらなかった。

一ノ沢のナメ滝と紅葉

一ノ沢は行きたい方向とは別の方向に遡上し始めたので，その支沢に沿って登ることとした。ヤブを漕いで前田さんが力強く登っていく。われわれはそれを「前田新道」と呼んだ。このヤブを越えて稜線に出れば，アプローチの仕方は間違ったかもしれないが，滝を高巻くルートに出るはずだと考えていた。

あの辺りが稜線だろうと思っていた木まで上がったが，稜線はさらに先だった。斜度はきつく，ヤブは深くなった。クマ笹を束にしてつかみ，どうにかして体をあげることを続けた。みんな疲労の色が濃い。特に握力がきつい。高度計で１０００ｍを越えた。さすがに高度を稼ぎすぎだ。戻るべきだ，と考え始めた。

一度休憩となり，須田さんと私で空身の偵察に出た。ヤブと格闘すること１０数分，稜線に出た。深い谷を挟んだ向かいの壁に南稜テラス（取付点）とそこにいる人たちが見えた。この稜線から懸垂下降ができるのか，下降点からテラスに登り返せるのか。考えたがあまりに不確定要素が多すぎる。ここは谷川岳で，われわれは本チャンが初めてだ。そのリスクを冒してはならない。そう思った。

偵察を終えて，状況を報告し，撤退を決めた。手袋を装着して笹をつかみ，クライムダウンするように後ろ向きに下りた。登りよりずっと楽だ。みんな随所で，「ここ，よく登ったなあ」と言っていたけど，本当にそうだ。このヤブで，この急斜面，なかなかできない，いい経験となった。途中，ヤブの斜面５０ｍを２回，懸垂下降した。５０ｍは経験のない長さで楽しかった。一ノ沢本流に戻り，どうにか見つけた支点から，さらに懸垂下降を２回した。登りで苦労した悪場もそれでどうにかなった。

一ノ沢と一ノ倉沢の出合に下り立ち，もう一度，あの「絶壁」の方を見に行った。「あっ，なんだ，そうか」という声が上がる。明るくなって見てみれば，「絶壁」なんてなくて，行くべきルートにも残置ロープが掛かっているのが見えたという。朝の出来事は何だったんだという話をしていたら，小山田さんが「一ノ倉に入るのはまだ早いっていうことで（神様的なものが？），そうしたんじゃない？」と言った。それを聞いて，私は随所にあったレリーフを思い出していた。一ノ倉沢に不思議な形の雲がかかっていた。

私は「明日の予備日を使って」，という気持ちがないではなかったが，私もみんなも疲れすぎていたし，行ったら行ったで何時に帰れるかわからないし，「気持ちを切り替えて来週は沢に行こう」と言われ，「そうだな」と思った。　（記：岡村）

CT：起床 2:00－道の駅（テント場）発 3:05－町営駐車場（ロープウエイ乗り場近く）3:30－一ノ倉沢出合 4:50－撤退開始 11:00 頃－一ノ倉沢出合 16:10